

「違い」は「可哀想」なのか

立命館守山中学校二年 片山 りさ

高次脳機能障害という障害があります。厚生労働省の調査では日本で約27万人の患者がいるとされており、実は身近にある障害であることがわかります。この障害は、交通事故などの影響で脳の一部に後遺症が残ることですが、その症状の殆どは外見ではわかりづらく、「見えにくい障害」とも言われています。例えば、失語症、記憶障害など症状は人によって様々です。

私がこの障害を初めて知ったのは中一の夏、父に誘われて大阪で開催された高次脳機能障害の当事者を支えるNPO法人のイベントに参加したときのことでした。そこで私はある男性に出会います。彼は現役大学生ですが、高校生のときに交通事故の影響で記憶障害と失語症、他にも身体が麻痺して動かないなどの症状がありました。彼は藍デザインコンクリートというものを制作していて、そのイベントではそれらを実際に触らせてもらえました。触り心地はやはりコンクリートであるのでとても固く、でも不思議な温かみがありました。

私がすごいですねと話しかけると、彼はにこりとほほえみました。彼の表情は優しく、とても穏やかで、どこか心にじんわりと伝わってくるものがありました。その後も高次脳機能障害の当事者の方々が実際に体験したことなどについての講演が続けられましたが、どの講演も、それぞれの強い思いやその思いを届けるための様々な活動で今までの私では気づくことのなかったものばかりでした。

また、どの講演でも当事者の方々が自分達の個性や強みに揺るぎない自信を持っていることに驚くと同時に強く感動しました。

特に記憶に残った講演は、バリアフリーなどの当事者の方々を助

けるような社会の仕組みを当事者の方々が実際どう思うのかという内容でした。当事者の方々は勿論そのような活動や仕組みを使用したときにすぐ助けられる、と言っていました。一方、それを使用することで真っ先に障害者として見られることに違和感を感じてしまう、と言葉にしていました。「障害者として特別に扱われたくない、同じ人間として見てほしい。」これは当事者の方々が言っていた言葉です。ここで使用される特別な扱いとは障害があるから可哀想だと思われる、過度にサポートされたり、自分の姿を子供に見せないように大人が無理やり目をそらせるなど、まるで別物みたいな扱いを受けることのようにです。私はこのことを聞いてふと、小学生の頃の記憶が頭によぎりました。それは習い事の帰り道の途中で転び、足を怪我してしまったという出来事です。私はなんとか家まで帰ろうと足を引きずって歩いていった矢先、近くにいた男の子に変な歩き方、と言われました。すると男の子の母親がその男の子に見ちゃだめでしょ、と言って早々と去っていったのでした。私はその親子の後ろ姿を見て、何故か胸が強く締めつけられるような痛みを覚えしました。それはきっと、可哀想な人だと同情されているような気がしたからだ、今ではわかります。

障害はつらくて可哀想だというイメージは現代でも強く残っていると思います。例えば、パラリンピックの試合は、オリンピックなどに比べ、テレビではほとんど放送されません。このように私たちは当事者の活動を見る機会が少ないです。だから少し私たちと違うだけで弱い存在だと感じてしまうのだと思います。

私もまだまだ知らないことが多いけど、障害があるから可哀想だ、という思い込みだけでその人を区切ってしまうのはとても残念なことだということは知っています。

だから私はもっと障害のある人たちを理解していききたいです。